

ニワトリと長田神社(長田区)

長田神社には古くからニワトリについての信仰があります。これは長田大明神が、「鶏〈にわとり〉の声聞ゆる里は吾〈われ〉有縁〈うえん〉の地なり」（ニワトリの声のきこえる村は、自分と縁の深い土地である）と、いわれたことによると伝えられています。氏子はニワトリを神のおつかいとしてたいせつにし、害を加えることはもちろん、ニワトリの肉は食わず、女の人にはニワトリの羽毛〈はねげ〉でお歯黒〈はぐろ〉をそめることさえもしなかったといいます。



むかし、長田神社がつくって配った「摂津〈せつづ〉本宮長田大明神御利生〈ごりしょう〉」という書き物にはふしぎな利益があることをあげています。つぎの四つのお話がその一部です。

(1) 淡路の国の上山村に、千太郎（十九才）、なお（十七才）という夫婦が住んでいました。この二人はらい病にかかり苦しんでいました。そこで、一生、鳥類を絶〈た〉って長田神社に信心しました。そのけなげな信仰に長田大明神は二人のらい病をなおされました。



(2) 兵庫の新在家町に明石屋喜兵衛〈あかしやきへえ〉という男がいました。この男は、長田の松原で、酒をのんだいきおいで鳥さしの遊びをしておりました。すると、突然、気が狂い、とうとう一生、気狂いのままであったといいます。

(3) 長田神社の氏子である長田村の庄三郎のむすこ伊兵衛という人が、大阪南瓦屋町の土人形師のところへ奉公に上がりました。そこで、鳩〈はと〉の人形をこしらえたところ、たちどころに両手が動かなくなりました。

(4) 長田神社の氏子である須磨村で、鳩〈はと〉の糞〈ふん〉を瓜〈うり〉の肥料にしたところ、鳩の形の瓜ができました。



このように、ふしぎな話はあまりたくさんありすぎて紹介しつくせません。

いまでも、長田神社ではニワトリをたいせつにしていますが、太平洋戦争前には、境内〈けいだい〉にはなし飼〈が〉いにしており、参拝の外国人たちも“チキンテンプル”とよんで親しんでいました。（『長田神社点描』）